

# 一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究：『砂の女』・『燃えつきた地図』・『内なる境界』

大場，健司

<https://hdl.handle.net/2324/4110576>

---

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 大場健司

論 文 名 : 一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究  
——『砂の女』・『燃えつきた地図』・『内なる境界』——

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文『一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究——『砂の女』・『燃えつきた地図』・『内なる境界』——』は、日本のアヴァンギャルド (Avantgarde) 作家、安部公房 (1924-1993 年) の小説やエッセイを、1960 年代における同時代言説、及びアメリカ文学との相互交通から比較文学的に論じたものである。本論文は第一部「脱アメリカの物語」(第一章、第二章)、第二部「アメリカ文学との相互交通」(第三章、第四章)、第三部「エッセイと同時代言説」(第五章、第六章) から成り、具体的には、1960 年代における「都市」(City) や「アメリカ」(America) をめぐる同時代言説や、同時代の日本におけるアメリカ文学受容との関係、安部が現代アメリカ文学に与えた影響を論じている。

近年の先行研究では、『砂の女』(新潮社、1962 年 6 月) までの作品、特に 1950 年代の作品が政治運動／芸術運動との関連で論じられることが多い。言い換えれば、これは安部が 1962 年 2 月に日本共産党除名が公表されるまでの作品を「政治的」に評価することと同義である。このタイプの先行研究としては鳥羽耕史『運動体・安部公房』(一葉社、2007 年 5 月) や坂堅太『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナショナリズム』(和泉書院、2016 年 10 月) を挙げることができよう。すなわち、こういった先行研究では、安部の政治性がマルクス主義 (Marxism) や 1950 年代の対米民族主義に還元されてしまっているのだ。

しかしながら、日本共産党除名後の 1960 年代、安部は排外的なナショナリズム (Nationalism) への批判を強めてゆき、1968 年の段階では、「内なる境界」(『中央公論』1968 年 11-12 月号) などの一連のエッセイでその批判を強めて、ナショナリズムに抵抗する「都市」像を提示している。探偵小説『燃えつきた地図』(新潮社、1967 年 9 月) においては「都市」での「失踪」が主題化されていたが、一九世紀アメリカの作家ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) の作品においても「都市」での「失踪」が主題化されていた。更に、安部が描いた「都市」での「失踪」は、現代アメリカのポストモダン (Postmodern) 作家ポール・オースター (Paul Auster, 1947-) に影響を与えており、ここから日本文学／アメリカ文学の相互交通が前景化される。以上のように、本論文は、1960 年代に安部が主題化した「都市」を、1960 年代の同時代言説やアメリカ文学との関係から論じたものである。

序章では、安部のエッセイ「アメリカ発見」(『中央公論』1957 年 11 月号) におけるアメリカ表象とアメリカ文化理解を、ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の実存主義と鶴見俊輔 (1922-2015 年) のプラグマティズムとの関係から論じた。

第一章では、『砂の女』における「沙漠」(境界) の表象を、同時代の日本におけるアメリカ文学受容との関係から考察した。具体的には、アメリカ出身の詩人 T・S・エリオット (Thomas Stearns

Eliot, 1888-1965) の『荒地』(*The Waste Land*, 1922) やアメリカの実存主義作家ポール・ボウルズ (Paul Bowels, 1910-1999) の『極地の空』(*The Sheltering Sky*, 1949) との関係から論じた。

第二章では、安部公房『砂の女』とポール・オースター (Paul Auster, 1947-) の『闇の中の男』(*Man in the Dark*, 2008) における「穴」を比較した。『砂の女』では、サルトルの「対自存在」(*pour soi*) の影響を受けながら、「世界」に空いた「裂け目」での自己差異化が描かれていた。一方で、『闇の中の男』では、ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の幽霊論と同時代的な類似性を見せるパラレル・ワールド論が展開されていた。

第三章では、安部の『燃えつきた地図』とホーソーンの短編小説「ウェイクフィールド」("Wakefield," 1835) における「都市」での「失踪」を比較した。安部がサルトルの実存主義を応用しながら、「既成事実」を括弧で括って現象学的還元する「失踪」を描いていたことを論じた。

第四章では、『燃えつきた地図』とポール・オースターの『幽霊たち』(*Ghosts*, 1986) における絵画のメタファーを比較した。具体的には、『燃えつきた地図』に登場する「ピカソの石版画」が、絵画のメタファーを用いながら「都市」の住民の「単独性」を示していることを論じた。

第五章では、安部のエッセイ「ミリタリィ・ルック」(『中央公論』1968年8月号) を扱い、「軍服」を着ながらにしてナショナリズムを現象学的還元するという実存主義的なパロディ論が展開されていたことを論じた。安部は、三島由紀夫 (1925-1970年) の「軍服」やロラン・バルト (Roland Barthes, 1915-1980) の『神話批評』(*Mythologies*, 1957) の軍服論を受容して、「軍服」論を展開していた。

第六章では、エッセイ「異端のパスポート」(『中央公論』1968年9月) が、スタンリー・キューブリック (Stanley Kubrick, 1928-1999) 監督の映画『2001年宇宙の旅』(*2001: A Space Odyssey*, 1968) をフレームワークにしなが、都市空間の遊牧民への進化をノマドロジエ的に描いていたことを論じた。

以上のように、本論文は、1960年代の安部公房文学の全体像を、アメリカ文学や同時代言説、多様なメディアとの関係性から比較文学的に論じたものである。